様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６月　６日現在

機関番号：42663
研究種目：基盤研究 C
研究期間：2010 ～ 2012
課題番号：22592533
研究課題名（和文）　妊娠中からの人的ネットワークの調整と泣きへの対応を含む子育て支援プログラムの構築
研究課題名（英文）　Development and validation of parenting support program to cope with infant crying
研究代表者
岡本　美和子（OKAMOTO　MIWAKO）
日本体育大学女子短期大学部　幼児教育保育科・教授
研究者番号：70435262

研究成果の概要（和文）：
養育者による虐待要因の 1 つである子どもの泣きは、出産後早期の母親の Emotional distress を引き起こすといわれている。母親の Emotional distress への予防的看護介入として妊娠後期に開催される両親学級で、“子どもの泣きへの対応プログラム”を導入することにした。出産後 3 週及び 3 ヵ月の母親への介入効果を検討した結果、母親の Emotional distress について効果がみられた。子どもの泣きに関する正しい知識と適切な対応が母親の自信回復に繋がり、Emotional distress によって引き起こされる虐待予防に役立つと考えられた。

研究成果の概要（英文）：
Crying of infants is associated with child abuse and mothers' emotional distress. We developed the "Infant Crying Support Program (ICSP)" that provides pregnant women appropriate information and strategies to cope with infant crying. A comparative outcome study was conducted to determine the effectiveness of the ICSP. Mothers in the ICSP group showed significantly reduced emotional distress at three weeks and three months after birth as compared to those in the control group. Implementing the ICSP may be useful to prevent child abuse by distressed mothers.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
2012 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：母性・女性看護学
キーワード：子どもの泣き，　介入研究，　Emotional distress，　両親学級，　児童虐待

１．研究開始当初の背景

日本のみならず世界における深刻な社会問題の１つである児童虐待については、虐待に至る直接的誘発要因として子どもの泣きが関連していることが明らかとなっている。母親が対処に困難を感じる原因不明の子どもの持続する泣きは、出産後２～3 週頃に出現し、3 ヵ月過ぎまで頻繁に認められる。子どもの泣きが持続することは、世話を行う母親にとって強いストレスとなり、特に初産婦にとっては育児への不安や母親としての自信の喪失といったEmotional distressを引き起こし、長期化することで危機的な状況へと追い込む要因になると考えられている。母親の Emotional distress に対しては、子どもの泣きへの正しい知識と適切な対応について、出産直後から情報提供することが有効であると国外での報告がある。しかし、子どもの泣きが出産後 2 週頃より出現することや国内における入院中のスケジュール、また母親の疲労を考慮すると、妊娠後期に出産施設での看護介入が有効であると考えられる。そこで、妊娠後期に開催される両親学級において、子どもの泣きとその対処方法及び子育て支援に関するリソースの情報提供、また人的ネットワークの調整に繋がる“子どもの泣きへの対応プログラム”を導入することが母親の Emotional distress に有効であると考えた。

２．研究の目的

本研究の目的は、妊娠中の初産婦を対象に出産後早期の子どもの泣きへの対応を含めた人的ネットワーク調整のための子育て支援プログラムを展開することである。

・先行研究を参考に、出産後早期の子どもの泣きへの対応を含めた人的ネットワーク調整に繋がる“子どもの泣きへの対応プログラム”を作成する。

・“子どもの泣きへの対応プログラム”を導入したことによる出産後の母親の Emotional distress の介入効果を検討する。

３．研究の方法

・期間：平成 24 年 3 月～平成 25 年 3 月

・対象：T 大学病院産科外来に受診、また両親学級に参加する初産婦で選定基準に合致し研究参加への承諾が得られた女性を対象とした。既に両親学級への申し込み済みの初産婦を介入群、そうでない者を対象群とした。

・方法：研究参加への承諾が得られた初産婦全員に妊娠後期と出産後 3～4 週、3 ヵ月頃に質問紙を郵送した。質問紙では、属性、新版 STAI、子育て支援状況を確認した。その他、出産後の母親の Emotional distress については先行研究を参考に、子どもに泣かれた際の『不安感』『苛立ち感』『(母親としての)自信の揺らぎ』『無力感』と現在の疲労感を介入群及び対象群の両群にたずねた。

・介入内容：先行研究を参考に看護介入のための“子どもの泣きへの対応プログラム”を作成した。はじめに乳児の泣き声のテープを 1 分間流した後、予め準備した冊子を見ながら、①子どもが泣くことの意味、成長に伴う変化と特徴、②泣きへの対処方法、③パートナーの役割と共に子育てすることの重要性、④親子が集う地域のクラス、⑤子育て支援に繋がる社会資源等について紹介、説明した。介入期間中は、両親学級の前半で分娩経過、立会い分娩における産婦への支援方法など通常の内容を説明、後半に“子どもの泣きへの対応プログラム”を行った。対象群へは、妊婦外来での通常のケアとして、集団指導と同様の内容を個別指導で行った。

・倫理的配慮：個人の自由意志の尊重、研究協力の有無により不利益が生じないこと、情

報の取り扱い等について文書と口頭にて説明した。また調査対象施設の倫理審査委員会の承認を受け実施した。

４．研究成果

有効回答数は127名(83.5%)、介入群77名、対象群 50 名であった。子どもの平均出生体重は、介入群 2999.7ｇ(SD±387.5)、対象群 2988.4ｇ(SD±349.2)、母親の平均年齢は介入群34.5歳(SD±4.1)、対象群32.9歳(SD±5.2)であった。その他、両群の属性情報に統計的な有意差はみられなかった（表1)。

出産後 3～4 週頃の母親の Emotional distress は、『不安感』『自信の揺らぎ』と疲労感及び状態不安(STAI)について介入群に有意な低下がみられた（表2)。また、出産後3ヵ月頃の母親の Emotional distress では、『自信の揺らぎ』『無力感』について介入群に有意な低下がみられた（表3)。

表１　児と母親の属性

項目	介入群(±SD)	対象群(±SD)	p
出生体重	2999.7(387.5)	2988.4(349.2)	n.s,[a)]
男児	45	30	n.s,[b)]
母親の年齢	34.5(4.1)	32.9(5.2)	n.s,[a)]
特性不安(STAI)	37.6(8.6)	40.1(10.0)	n.s,[a)]

a) t-test,　b) x^2test,　p< .05

表２　Emotional distress と疲労感、状態不安(STAI)の比較　(出産後3～4週)

項目	介入群(±SD)	対象群(±SD)	p
『不安感』	4.2(2.8)	5.6(2.9)	.01
『自信の揺らぎ』	4.5(3.0)	5.7(3.3)	.03
疲労感	3.1(0.7)	4.4(0.6)	.01
状態不安(STAI)	41.0(9.3)	46.2(9.8)	.00

t-test,　p< .05

表３　Emotional distress の比較（出産後3ヵ月）

項目	介入群(±SD)	対象群(±SD)	p
『自信の揺らぎ』	3.3(2.7)	4.8(3.1)	.00
『無力感』	3.1(2.7)	4.4(3.3)	.02

t-test,　p< .05

“子どもの泣きへの対応プログラム”を導入したことにより、出産後 3～4 週頃の母親の Emotional distress は『不安感』『自信の揺らぎ』に明らかな介入効果がみられた。泣き止ませ難い子どもの泣きが母親の世話の仕方による問題ではなく、子どもの成長の過程で生じる生理的な理由であるということが、母親の安心感と先への見通しに繋がったと考えられる。しかし、『苛立ち』と『無力感』について有意な差はみられなかった。その背景は明らかでないが、分析結果及び先行研究等から母親の疲労感と関連していると考えられた。そのため、出産後早期からの直接的、間接的支援の必要性を母親と共に身近な支援者に具体的に提示できる内容をさらにプログラム中に取り入れることを今後検討していきたい。

出産後3ヵ月頃は、子どもの泣きはやや落ち着きをみせ、母親の疲労感や不安感も軽減し子どもとの生活リズムを整えつつある時期と考えられる。この時期の母親の Emotional distress における両群比較では、『自信の揺らぎ』及び『無力感』について介入効果がみられた。このことから、子どもの泣きへの理解と対応に関する情報不足は、母親としての自信の揺らぎと共に無力感を長期にわたり持続することに繋がることが示唆された。

今回の調査により、妊娠中からの“子どもの泣きへの対応プログラム”を導入することが母親の Emotional distress の予防に対し有効であり、Emotional distress によって引き起こされる虐待予防の一助になると考えられた。

同時に、疲労感と連動して生じるであろう Emotional distress に対する取り組みが求められており、出産直後からの人的ネットワークとして母親が必要としている直接的、間接的育児支援の中味を吟味し積極的に導入で

きるよう検討していきたい。

今後は、“子どもの泣きへの対応プログラム”の内容をさらに充実させ、子育て支援プログラムの有効性をより高めるための開発研究を継続していきたいと考えている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

1)岡本美和子：子どもの泣きと母親の情緒的動揺．日本乳幼児医学・心理学会，p125-132，2010.

2)池田悠，内藤智子，岡本美和子：育児学級を担当した助産師の気づきと変化．　日本看護学会論文集（母性看護），p78-81，2011.

（平成 22 年度日本看護学会委員会推薦論文賞受賞）

3)内藤智子，仲松万里子，岡本美和子：子どもの泣きによって生じる初産婦の情緒的動揺に対する育児学級の介入効果．第42回 日本看護学会論文集（母性・小児看護），2011，p91.

4)Miwako Okamoto, Hideaki Ishigami, Kumiko Tokimoto, Megumi Matsuoka : Early parenting education as intervention strategy for emotional distress in first-time mothers -- A propensity score analysis. Maternal and Child Health Journal, open access, p1-12, 2012.

5) 仲松万里子，内藤智子，岡本美和子：両親学級に“子どもの泣きへの対応プログラム”を導入したことによるパートナーの気づきと変化．第 43 回日本看護学会抄録集，p65，2012.

〔学会発表〕（計 5 件）

1) 岡本美和子：乳児の泣きへの対応を含む子育て支援プログラムの作成と実践．日本保育学会，松山市，2010.

2)池田悠，内藤智子，岡本美和子：育児学級を担当した助産師の気づきと変化．　第 41 回日本看護学会（母性看護），つくば市，2011.

3)Miwako Okamoto, Kumiko Tokimoto, Hideaki Ishigami, Megumi Matsuoka : Longitudinal study of correlated factors for emotional unrest in mothers experienced as a result of infant crying. 16th International Society of Psychosomatic Obstetrics and Gynecology, Venice, 2010.

4)内藤智子，仲松万里子，岡本美和子：子どもの泣きによって生じる初産婦の情緒的動揺に対する育児学級の介入効果．第42回 日本看護学会（母性・小児看護），東京，2011，

5) 仲松万里子，内藤智子，松岡恵，岡本美和子：両親学級に“子どもの泣きへの対応プログラム”を導入したことによるパートナーの気づきと変化．第43回日本看護学会，甲府市，2012.(優秀発表賞受賞)

〔図書〕（計 2 件）

1) 岡本美和子：「抱きしめたい君がやってくる」．日本体育大学女子短期大学部 保育専門研究室発行，p1-10，2011.

2) 岡本美和子，時本久美子：「こんにちは遊び時間」．保育専門研究室・幼児体育研究室発行，2012.

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
　なし

６．研究組織
(1)研究代表者
　岡本　美和子（Okamoto Miwako）
　研究者番号：70435262

(2)研究分担者
　なし

(3)連携研究者
・松岡　恵（Matsuoka Megumi）
　研究者番号：90229443

・時本　久美子(Tokimoto Kumiko)
　研究者番号：50105011